

学業成績に影響を与える要因の検討

Examination of the Factor to affect the Academic Performance

山北 和幸・土田満*

井戸田整形外科名駅スポーツクリニック

*愛知みずほ大学大学院

Kazuyuki YAMAKITA and Mitsuru TSUCHIDA*

Idota Orthopedics Meieki sports clinic

** The Graduate Center of Human Sciences, Aichi Mizuho College*

Abstract

In order to enhance the quality of education for students with poor academic performance, we conducted a questionnaire survey on lifestyle habits, somatic symptoms, learning habits, learning attitudes, social support, egogram and performance, and examined the factors to influence on academic performance. Academic performance was divided into three quantiles, “lower GPA group”, “medium GPA group”, and “upper GPA group”. In relation to egograms, the upper GPA group had higher AC scores for compared to the lower GPA group. The medium GPA group and the lower GPA group displayed a pattern of lower than the general average A scores. In the covariance structure analysis of GPA and related factors, lifestyle habits influenced GPA and subjective fatigue. Personality influenced behavior related to academic performance and support of friends and family, and support of friends and family influenced GPA through support of teachers. Further, coping measures for situations when students were unable to understand, influenced GPA and behavior related to academic performance, through the mediation of frequency of dozing. From the above, it is suggested that in order to improve the quality of education teachers need to understand the background of the students including their personality

キーワード: 学業成績; エゴグラム; 関連要因.

Keyword: Academic performances; Egogram; Related factors.

I はじめに

近年、学生の中途退学や休学の問題以外に、卒業後、就職したあとの離職率も問題となっている。厚生労働省は平成 27 年 3 月に卒業した新規学卒就職者離職状況の調査¹⁾を行った結果、3 年以内に離職した大学生は 31.8%、短大生などは 41.5%となっており 3~4 人に 1 人が離職している状況であることを報告している。この要因のひとつとして中島²⁾は AO (Admissions

Office) 入試の導入や学校設置基準の規制緩和により全入時代になった背景が原因であるため AO 入試の見直しの必要性を報告している。またベネッセ教育総合研究所が、新入生の問題点について大学に調査³⁾を行ったところ、約 60%の大学が、学習習慣が身につけていない学生や学ぶ目的が明確ではない学生がいることを報告しており、全入時代の影響を受けていることが考えられる。平⁴⁾は大学情報の認知度と大学入学後の

学業成績との関連性に対して調査を行った結果、大学の理念、Admission policy を認知していることや大学での学びへの期待に関連性がみられ、これらの認知と学業成績の推移が関連していたと報告しており、退学や休学を予防するには、入学してくる際に学習習慣の有無や動機がしっかりしているか確認する必要がある。また大学や専門学校は、高校までの義務教育とは異なり、入学してから卒業するまでに学生自身が自己管理しなければならない部分が大きく、周囲のサポートや環境に左右されやすい。井上⁵⁾は、母親・教師から褒められた頻度と自尊感情尺度得点とに相関がみられる一方で叱られた頻度には有意な相関は見られず、褒められるほど自尊感情が高くなることや両親や教師に褒められた内容と礼儀・他者への気遣い、性格・態度に有意な関連が認められたことを報告しており、一時的な能力や結果よりも継続的に褒めることが必要であることを示唆している。山北ら⁶⁾の調査からもGPA上位群は教員のサポートを受けられやすく、理解できていない時など質問をできるが、GPA下位群は友人・家族のサポートを優先する傾向のため教員は質問しやすい雰囲気と声掛けが重要であることを報告している。そのため教員は学生が理解できていない部分を把握する必要がある。

また先行研究において、山北ら^{6) 7)}は生活習慣、身体症状、学習の習慣、学習態度、ソーシャルサポートと学業成績との関連について専門学生にアンケート調査を行った結果、GPA下位群はGPA上位群に比べ、生活習慣の乱れや学習習慣がなく娯楽を優先し、学習を後回しにすること報告していることから性格も含めて検討することが今回の課題となった。

久米ら⁸⁾は子供のころの家庭での過ごし方、学校生活、職種のタイプ、業務のタイプとパーソナリティ特性5大要因との関係について検討し、現在のパーソナリティ特性は、現在の職種、業務のタイプからの影響は比較的弱く、子供・中学時代の過ごし方は現在のパーソナリティの形成要因であり、さらに職種とのマッチングが特定のパーソナリティ形成に影響することを報告しており、学生を指導する際には、過去の過ごし方も把握する必要がある。

この様に学業といくつかの要因との個々の関連を検討した報告は見られるが、多くの関連要因との相互の関係性を検討した報告はほとんど見られないのが現状である。

以上のことを踏まえ、本研究では、成績が不良である学生における教育の質の向上を目的とし、今回は性格も含めて学業に影響を与える要因とそれらの相互の関連性を検討した。

II 研究方法

1. 研究対象者

愛知県のA専門学校の理学療法学科、及び看護学科に在籍している学生131名とした。

2. 調査方法

方法は無記名自己記入式アンケート調査を実施した。また今回は著者らの先行研究の調査結果も用いて新たな視点より解析を実施した。

3. 調査内容

アンケート内容は、著者らの先行研究と同様の以下の7項目(1)～(7))と新たに1項目(8))を追加した計8項目とした。

1) 対象者の属性

所属学科、学年、性別、年齢の4項目について選択式、及び記述式で回答を求めた。

2) 成績

本調査では、Grade Point Average (以下、GPA)を用いた。GPAは前年度終了時のポイントを記述式で回答をもとめた。またGPAを正確に回答してもらうため、成績を管理している受付にて各自、GPAのポイントを確認し、回答してもらった。なお調査校のGPA最高値は11ポイントである。また、その他の項目との比較検討をするため、GPAの分布により「下位群」「中位群」「上位群」の3分位に群分けした。

3) 生活習慣

(1) 睡眠の習慣

起床時間(平日・休日)、就寝時間(平日・休日・アルバイト日)、1日の睡眠時間(平日・休日・アルバイト日・試験1週間前)の9項目について5件法の選択式とした。

(2) アルバイトの習慣

アルバイトの有無、試験1週間前のアルバイトの有無(平日・休日)、1週間あたりのアルバイト時間の3項目について5件法の選択式とした。

(3) 趣味・娯楽の習慣

平日と休日における1日あたりのテレビ・ビデオの視聴時間、SNS(Line、Twitter、Facebookなど)・メールの時間、インターネット(課題・勉強は除く)の利用時間、ゲーム(パソコン・スマートフォンも含む)の利用時間、その他の趣味(身体作り・娯楽・釣り・旅行・読書など)の利用時間の10項目について5件法の選択式とした。

4) 学習の習慣

1週間の勉強時間（普段・試験前）、予習の有無、復習の有無、授業で理解できなかった時の対応、自己学習時の音楽を聴く習慣の6項目について4もしくは5件法の選択式とした。

5) 身体症状

主観的な睡眠の状況、講義中の居眠りの頻度について4件法の選択式とした。また身体の自覚的疲労は日本産業衛生学会・産業疲労研究会⁹⁾の自覚症しらべを用いた。これは、I群ねむけ感、II群不安定感、III群不快感、IV群だるさ感、V群ぼやけ感の5群25項目の疲労の訴えから構成されている。

6) 授業中や試験前、課題が提出されている時の行動

中西ら¹⁰⁾の大学生を対象とした日本語版学業的満足遅延尺度を一部修正して用いた。

7) 友人・家族や教員のサポート

片受ら¹¹⁾の大学生用ソーシャルサポート尺度を用いた。尺度は23項目からなる。友人・家族のサポートは23項目、教員のサポートは、一部修正して21項目を使用した。また、その他の項目と比較検討をするため、周囲のサポートのとらえ方によって、サポートされていると感じている群を「サポートあり群」、感じていない群を「サポートなし群」の2分位に群分けをした。

8) 性格特性

性格特性は、東京大学医学部心療内科 TEG 研究会¹²⁾が、自我状態を客観的に評価するために作成した質問紙法の新版東大式エゴグラム第2版（以下、エゴグラム）の53項目を用いた。交流分析に用いられるエゴグラムは、自我状態を5つに分類し、「批判的親；Critical Parent 以下、CP」「養育的親；Nurturing Parent 以下、NP」「成人；Adult 以下、A」「自由な子ども；Free Child 以下、FC」「順応した子ども；Adapted Child 以下 AC」に分類される。

各質問項目への回答は、「いいえ=0点」「どちらでもない=1点」「はい=2点」の3件法の選択式とした。得られた点数は、自我状態を表し、高すぎても、低すぎても社会的適応に問題が生じやすいことを示している。

4. 分析方法

対象者の属性、GPAは単純集計を行った。

またGPA「下位群」「中位群」「上位群」の3群と性格特性の関連については、正規性の検討により一元配

置分散分析とその後の検定、あるいはKruskal-WallisのH検定とBonferroni補正のMann-WhitneyのU検定により多重比較を行った。

また生活習慣、学習習慣、身体症状、課題が出ている時の行動、周囲からのソーシャルサポート、性格特性とGPAの相互関係を検討するためにSpearmanの相関係数を算出するとともに共分散分析による検討を行った。より単純なモデルを採択するために適合指標としてBIC値を用いた探索的モデル特定化を行った。

解析には、IBM SPSS statistics Ver.24と共分散構造分析ソフトIBM SPSS AMOS Ver.24を用いた。

5. 倫理的配慮

学校長ならびに各学科長に許可を得て行った。調査対象者に、得られたアンケート結果は、個人を特定できないこと、統計処理及び解析を行う旨を口頭とアンケート用紙の文章にて説明し、同意を得て調査を実施した。

III 結果

調査対象者115名を分析対象者とした。

1. 対象者の属性

Table 1に対象者の属性を示した。理学療法学科60名、看護学科55名で、年齢は22.0±4.51歳であった。

2. GPA

Table 2にGPAの内訳を示した。全体のGPAは8.62±1.41であった。対象者のGPAを成績の「下位群」「中位群」「上位群」の3区分に分けると「下位群（5.50～7.80の区間）」38名「中位群（7.88～9.27の区間）」38名「上位群（9.31～11.0の区間）」39名であった。

Table 1 対象者の属性

(n=115)					
項目	平均値±SD		最小値	最大値	
年齢(歳)	22.0±4.51		19	38	
所属・学科における人数の内訳					
項目	理学療法学科		看護学科		計(名)
	男性	女性	男性	女性	
学年 2年生	18	7	5	26	56
3年生	12	8	3	21	44
4年生	8	7	0	0	15
計(名)	38	22	8	47	115

Table 2 GPA の内訳

項目	GPA		
	平均値±SD	最小値	最大値
全体のGPA	8.62±1.41	5.50	11.00
(n=115)			
項目	GPA		
	下位群 (n=38)	中位群 (n=38)	上位群 (n=39)
GPAの平均	6.96±0.16	8.69±0.42	10.17±0.51
GPAの区間	5.50~7.80	7.88~9.27	9.31~11.0

3.GPA とエゴグラムとの関連

Table 3 および Fig 1 に GPA とエゴグラムとの関連を示した。多重比較におけるエゴグラムと GPA3 群間の差を比較した結果 (Table 3)、AC において GPA 上位群と GPA 下位群に有意差が認められ、GPA 上位群が GPA 下位群に比較して得点が高かった。また各カテゴリー別の得点平均値によるエゴグラム・パターン (Fig 1) をみると GPA 下位群は「AC」「CP」「FC」「NP」「A」、GPA 中位群は「AC」「CP」「NP」「FC」「A」、GPA 上位群は「AC」「CP」「A」「FC」「NP」の順に高く、GPA 下位群と GPA 中位群は、エゴグラムの点数が似たパターンを示したが、上位群は GPA 下位群と GPA 中位群と比較して AC の得点が高いパターンを示した。また有意差は認められなかったが、上位群に比べ、GPA 下位群と GPA 中位群は A の得点が低いパターンを示した。

Table 3 GPA とエゴグラムとの関連

項目	GPA			有意差	多重比較
	下位群(1) (n=38)	中位群(2) (n=38)	上位群(3) (n=39)		
CP(批判的親)	11.74 ± 3.79	12.42 ± 2.97	12.79 ± 3.47	n.s.	
NP(養育的親)	10.66 ± 5.46	12.08 ± 4.22	11.15 ± 4.17	n.s.	
A(成人)	9.61 ± 5.24	9.88 ± 4.46	11.69 ± 4.65	n.s.	
FC(自由な子ども)	11.32 ± 4.68	11.82 ± 3.86	11.26 ± 4.01	n.s.	
AC(順応した子ども)	11.76 ± 3.85	12.45 ± 3.57	13.97 ± 2.47	x	3>1

4.GPA と影響を及ぼす関連要因との相互関係

(1) GPA と影響を及ぼす関連要因との相関係数

Table 4 に GPA と影響を及ぼす関連要因との相関を示した。GPA は睡眠の習慣 (平日の起床時間、休日の就寝時間、アルバイトがある日の就寝時間、アルバイトのある日の睡眠時間)、アルバイトの習慣 (アルバイトの有無、週当たりのバイトの時間、試験前の平日のアルバイトの有無)、趣味・娯楽の習慣 (平日の SNS・メールの時間、平日のインターネットの利用時間)、学

習の習慣 (理解できなかった時の行動) と有意な負の相関が認められた。また学習の習慣 (試験前の 1 週間の勉強時間、自己学習時の音楽聴講)、身体症状 (講義中の居眠りの頻度)、学業的満足遅延、性格特性 (AC) と正の相関が認められた。

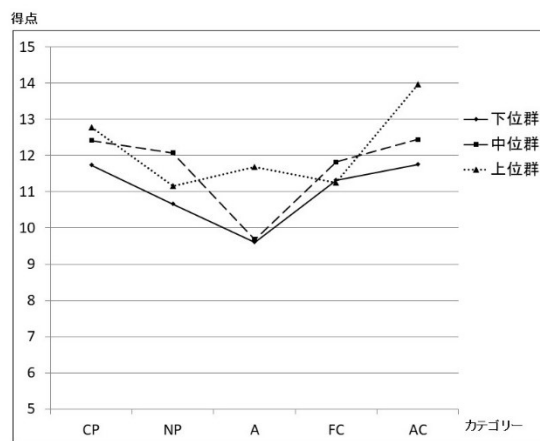


Fig.1 GPA とエゴグラムとの関連

(2) GPA と影響を及ぼす関連要因との共分散構造分析

共分散構造分析により、GPA と関連要因の因果関係明らかにするために、BIC を指標として適合度の良いパス図を検索した。最終的に探索的モデル特定化による最適モデルの結果は、GFI=0.775、AGIF=0.719、RMSEA=0.087 であった。不要な指標を削除したパス図 (Fig 2) を示した。

その結果、生活習慣は GPA と自覚疲労に影響を与え、さらに自覚的疲労を介して睡眠状況に影響を与えていた。性格は学業的満足遅延と友人・家族のサポートに影響を与えていた。友人・家族のサポートは教員のサポートを介して GPA に影響を与えていた。また友人・家族のサポートは理解できなかったときの対応、居眠りの頻度を介して GPA と学業的満足遅延に影響を与えていた。

IV 考察

1. GPA とエゴグラムとの関連

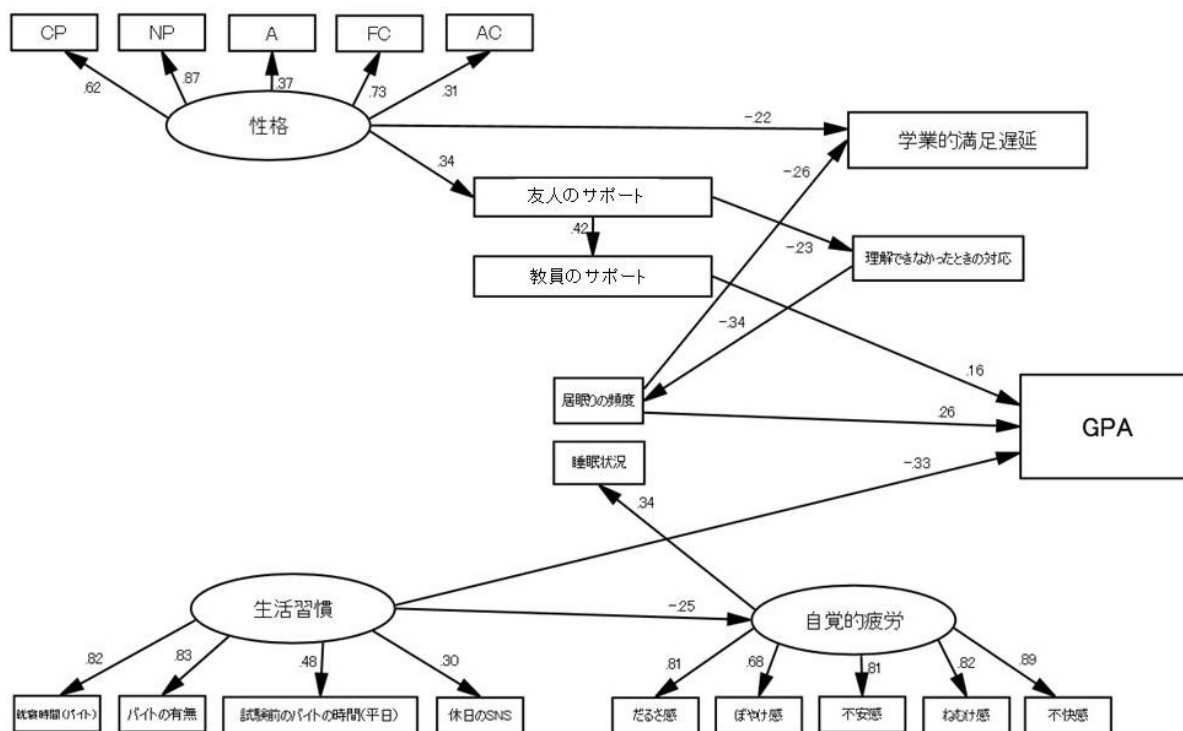
本研究のエゴグラムにおいて、GPA3 群間の差を比較検討した結果、GPA 上位群が GPA 下位群に比較して AC の得点が有意に高かった。

中川ら¹³⁾によれば、大学生にエゴグラムと学修状況を調査した結果、優の数が多い学生は AC が高く、留年生は CP が低い結果であったと報告している。本研究においても GPA 上位群は、AC の得点が高く、また東京大学医学部心療内科 TEG 研究会¹²⁾が報告している AC の

Table 4 GPAに影響を及ぼす関連要因の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
1 GPA	1.000	-.252**	-.313**	-.190*	-.360**	-.276**	-.278**	-.257**	-.188*	-.190*	.199*	-.184*	.311**	.338**	.189*	.269**
2 アルバイトの有無		1.000	.126	-.082	.709**	.447**	.879**	.375**	.404**	.189*	-.088	.093	-.104	-.090	.131	-.185*
3 平日の起床時間			1.000	.392**	.309**	.288**	.164	.103	.083	.271**	-.205*	-.006	.030	-.126	-.116	-.056
4 休日の就寝時間				1.000	.332**	.289**	-.015	.245**	.123	.212*	-.057	.185*	-.034	-.192*	-.331**	.032
5 アルバイトがある日の就寝時間					1.000	.645**	.654**	.400**	.346**	.213*	-.130	.116	-.063	-.214*	-.063	-.184*
6 アルバイトのある日の睡眠時間						1.000	.429**	.291**	.187*	.122	-.169	.084	-.113	-.241**	-.036	-.113
7 週当たりのアルバイトの時間							1.000	.402**	.422**	.201*	-.065	.092	-.081	-.156	.122	-.155
8 試験前の平日のアルバイトの有無								1.000	.307**	.232*	-.118	-.041	-.097	-.188*	-.114	-.174
9 平日のSNS・メールの時間									1.000	.459**	.002	.047	-.202*	-.159	.065	-.054
10 平日のインターネットの利用時間										1.000	-.194*	.140	-.074	-.282**	-.189*	-.010
11 試験前の1週間の勉強時間											1.000	-.126	-.149	.181	.354**	.153
12 理解できなかった時の対応												1.000	-.058	-.339**	-.315**	-.134
13 自己学習時の音楽聴講													1.000	.106	.009	.191*
14 講義中の居眠りの頻度														1.000	.332**	.175
15 学業的満足遅延															1.000	.047
16 AC																1.000

*:p<0.05 **:p<0.01



GFI=0.775 AGIF=0.719 RMSER=0.082

Fig.2 GPAと関連要因の相互関係

平均値と比べても得点は高かった。AC は従順で素直であるため、授業でわからないことを質問したり、教員のサポートを受け取ることができるため GPA 上位群は成績が良いことが推察される。一方、AC の得点が高すぎても、社会的に問題があり、AC の得点が高いほど従順で素直であるが、他人に依存し、感化されやすく、周囲に流され、主体性にかき劣等感を持ちやすいと報告している。龍ら¹⁴⁾によれば、学業的延引行動とエゴグラムを検討した結果、ピークエゴグラムにおいて養育的な NP、AC が学業的延引行動の先行要因になるとを示し、AC は 5 つの自我状態の中で、ストレスと関わっており、AC が高くなると不快な感情を処理できなることを報告している。また堤¹⁵⁾は、大学生の性格と学業成績を研究した結果、成績上位群は、論理的な A が高く、成績下位群や退学群は AC が高かったと報告しており、AC が高すぎても主体性を欠くことが推察される。本研究では、GPA 上位群は、学業場面における行動で学業を優先できる事から、ストレスを溜めないように、順応し自己抑制が高い事が推察されるが、教員は学生がストレスを溜めていないかを把握し、相談しやすい雰囲気を作ることが必要であることが示唆された。また、その他の CP、NP、A、FC と GPA3 群間との有意差は認められなかったが、GPA 中位群と GPA 下位群は A の得点が、東京大学医学部心療内科 TEG 研究会の平均値よりも低いことが認められた。本研究も堤と同様に GPA 中位群と GPA 下位群は A の得点が低いために、理論的に考えることができないことが GPA の低さに影響を及ぼしている可能性が示唆される。また龍らは、学業的延引行動と自我状態との関係を研究し、批判的な CP と養育的な NP、論理的な A と学業的延引行動に負の相関を認め、CP の低さによる責任感の乏しさ、NP の低さによる対人関係の乏しさ、A の低さによる合理的判断の困難さが学業的延引行動と関係することを報告している。そのため GPA 下位群においては、論理的に考える A の得点が低いことから、教員は問題解決などにおいて学生がつかまづいている部分を把握し、論理的な解決方法を指導する必要性が示唆される。

2. GPA と影響を及ぼす関連要因との相互関係

本研究では、共分散構造分析において GPA は生活習慣と性格の影響を受けており、生活習慣は GPA に直接的に影響を及ぼし、性格は、その他の要因を介して GPA に影響を及ぼしていた。特に GPA に大きく影響を及ぼす要因は生活習慣であることが認められた。

先行研究により^{7) 16) 17)}、生活習慣が乱れると身体症状や成績に影響をする報告は多くされており、今回の結果より、規則正しい生活リズムと就寝時刻と睡眠

時間が重要であることが示唆された。また生活習慣は自覚疲労に影響を与え、さらに自覚疲労を介して睡眠状況に影響を与えていた。これは身体症状によって睡眠の質に影響していることが示唆された。ただ学生は平日、休日、アルバイトのある日、試験前の状況によって、睡眠時間、アルバイトの時間などを体調にあわせて調整しているため、身体症状が直接 GPA に影響するのではなく、身体症状に影響する生活リズムの乱れが GPA に影響することが推察される。また性格は学業場面の行動に影響を与えていた。エゴグラムにおいて、GPA 下位群は、論理的に考える A の得点が低く、事実に基づいて合理的に判断できないため娯楽や休息を優先し、学業を後回しにすることが認められた。さらに性格は学業場面の行動と友人・家族のサポートに影響を与え、友人・家族のサポートは教員のサポートを介して GPA に影響を与えていた。塩澤¹⁸⁾によれば、新しい環境に遭遇した時に、友人、家族、教員の順番で、周囲のソーシャルサポートを感じ、信頼関係を築いていくと報告しており、本研究も同様に一番親しみやすい友人のサポートを通して、教員のサポートを受け、自尊感情や自己効力感が高まり、成績に正の影響を与えているものと推察される。龍¹⁹⁾は大学生の自尊感情に及ぼす影響の研究において、学業的延引行動の得点を 3 群に分け、学業場面において、課題の着手や完成を遅らせる習慣を繰り返す群ほど、自尊感情が低下することを報告している。教員は学業を後回しにする学生に対しては、学生の性格を加味して、目標や実行計画をたてさせ、気づきを促すような指導の必要性が示唆される。そのことが学業延引行動を改善し、自尊感情の低下を防ぐことが考えられる。

また友人・家族のサポートは理解できなかったときの対応、居眠りの頻度を介して GPA と学業場面での行動に影響を与えていた。GPA 下位群は理解できなかった時に、教員には聞かず友人に聞いたり、そのままにしておくという本研究の結果より、講義内容に興味がなかったり、理解ができないために居眠りをする人が多いため、学業的満足遅延に影響をしたと推察した。片受ら²⁰⁾はソーシャルサポートを多く受け取るためには、援助を自ら積極的に求めていくスキルの重要性を報告している。しかし山北らの報告より GPA 下位群は教員に聞けないため、こちらから声をかけていく必要性が示唆される。

反対に GPA 上位群は授業において理解できなかった事を教員に聞きくという行動をとることができ、学習習慣が定着し、勉強時間も多いため、1 人でも解決する能力があることが示唆された。ただ周囲のサポートをどの様に受け入れるかは、性格が関係する事が報告されており、教員は性格を含めた学生の背景を把握

し、指導することが重要であることが示唆された。

V 結論

本研究は、成績不良者における教育の質の向上を目的とし、学業に影響を与える関連要因とそれらの相互関係を検討した。

1. エゴグラムとの関連において、GPA 上位群が合理的・従順な AC の得点が高いパターンを示し、一方、GPA 下位群、中位群は理論的に考える A の得点が高いパターンを示すことが認められた。
2. 共分散構造分析から、生活習慣は GPA と自覚的疲労に影響を与え、自覚的疲労を介して睡眠状況に影響を与えていた。性格は学業的満足遅延と友人・家族のサポートに影響を与えていた。さらに友人・家族のサポートは教員のサポートを介して GPA に影響を与えていた。また理解できなかったときの対応、居眠りの頻度を介して GPA と学業的満足遅延に影響を与えていた。

以上のことより、成績は生活習慣の影響が大きく、規則正しい生活を指導する必要がある。一方で学業場面における優先順位の見直しや、周囲のサポートの受け取り方は、性格も含めた背景を把握して指導することが示唆された。

引用文献・参考文献

- 1) 厚生労働省「新規卒業者就職率と就職後3年以内離職率」
https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000177553_00001.html (参照 2020-08-02)
- 2) 中島 弘至: キャリア教育と若年者離職率: 統計分析からの一考察. 関西大学高等教育研究 6巻, 57-68, 2015
- 3) Benesse 教育研究開発センター「高大接続に関する調査」
<https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=3984>
- 4) 平 知宏: 大学教育情報の認知度と大学への受験・入学動機、大学入学後の学業成績. 大阪市立大学「大学教育」第16巻, 第1号, 8-15, 2018
- 5) 井上清子: 教師からの褒められ叱られ経験と自尊感情の関連について II. 文教大学教育学部紀要 第40巻, 95-102, 2017
- 6) 山北和幸, 他: 学習習慣・態度、ソーシャルサポートと学業成績との関連. 瀬木学園紀要 第17号, 24-33, 2020
- 7) 山北和幸, 他: 生活習慣と身体症状、学業成績との関連について. 瀬木学園紀要 第16号, 54-62, 2020
- 8) 久米功一, 他: パーソナリティ特性の形成要因—家庭・学校・職場の経験から—. 行動経済学 第7巻, 50-54, 2014
- 9) 自覚症しらべの使い方. 日本産業衛生学会産業疲労研究会.

<http://square.umin.ac.jp/of/>, 2008-04-10

- 10) 中西満悠, 他: 大学生を対象とした日本語版学業的満足遅延尺度の開発. パーソナリティ研究 第23巻 (3), 197-200, 2015
- 11) 片受靖, 他: 大学生用ソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の検討—評価的サポートを含む多因子構造の観点から—. 立正大学心理学研究年報 第5巻, 37-46, 2014
- 12) 東京大学医学部心療内科 TEG 研究会編: 新版東大式エゴグラム第2版. 金子書房, 東京, 2006.
- 13) 中川貴: エゴグラムに見る学生の対人傾向と学修状況. 工学・工業教育研究講演会講演論文集, 252-253, 2006
- 14) 龍祐吉, 他: 大学生の学業的延引行動とエゴグラムの自我状態との関係 (第1報). 交流分析研究 第39巻, 第1号, 39-45, 2014
- 15) 堤文生: 理学療法学科学生の性格と学業成績との関連 TEG (東大式エゴグラム) を用いて. 九州栄養福祉大学紀要 第11巻, 27-43, 2014
- 16) 長根光男, 他: 睡眠パターンと学業成績や心身状態は関連するか—夜間睡眠の質と量 日中の眠気と短時間睡眠の活用—. 千葉大学教育学部研究紀要 第63巻, 375-379, 2015
- 17) 松本廣子, 他: 高校生の生活習慣に関する調査研究—授業にみる居眠りについて—. 大阪教育大学紀要 第III部門 第57巻 第1号, 55-70, 2008
- 18) 塩澤聖子: 大学新入生を調査対象とした大学生用ソーシャルサポート尺度の作成. 学校メンタルヘルス Vol11, 33-42, 2008
- 19) 龍祐吉: 大学生の自尊感情に及ぼす学業的延引行動の影響. 東海学園大学紀要 第22号, 119-125, 2017
- 20) 片受靖: 新大学生用ソーシャルサポート尺度と精神的健康、援助的要請スキルの関連についての研究. 立正大学心理学研究年報 第14号, 65-70, 2016

利益相反

本研究に関する特記すべき COI はない